



谷一小だより

平成28年1月8日

No. 12

文責：中野

教育目標

- やさしく思いやりのある子ども
- きいきと主体的に学ぶ子ども
- から一杯運動し、丈夫な体をつくる子ども
- びのびと自分らしい生き方について考える子ども
- こころ広く集団の中で仲良く助け合える子ども

充実した3学期にしましょう

新年明けましておめでとうございます。保護者・地域の皆様におかれましては、御家族おそろいで新春をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。昨年は本校の教育活動に対しまして、御理解・御協力ありがとうございました。

一年の計は元旦にありと申しますが、今年も希望に向かって、明るく意欲的な子どもが育つよう、教職員が一丸となって努力してまいりたいと存じます。本年も本校の教育活動に対しまして、温かい御支援・御協力を宜しくお願いいたします。

楽しかった冬休みも終わり、子ども達や教職員が元気に顔をそろえて、本日より3学期がスタートしました。おかげさまで、休み中に大きな事故や病気の連絡がなかったことが何よりの喜びです。始業式で子ども達の顔を見ていますと、新年を迎え家族やお子様の今年の抱負を御家族で語り合ったのだなという感じが感じられます。“今年はこの年にしたい”という希望や笑顔に満ちた表情をたくさん見ることが出来ました。頼もしい限りです。3学期は、53日間（6年生は49日間）という短い期間ですが、学年のまとめと次年度の準備をする大切な学期となります。学習や生活のまとめをしっかりと行っていきたいと思います。特に、6年生にとっては、小学校生活の集大成となります。卒業そして中学生へという節目のときを迎えるわけです。更なる大きな目標に向かって、自分なりの取り組みをしてほしいと願っています。全校児童一人ひとりが自分の夢に向かって、さらに大きくたくましく成長するよう願っています。



地域でもあいさつをしよう

本校では、「進んであいさつしよう」を年間を通しての生活指導重点として、学校全体で指導しています。毎朝、昇降口で児童会執行部が中心となり、また各クラス順番であいさつ運動に取り組んでいる児童の明るい声が、聞こえてきます。年々あいさつが良くてできる児童が少し



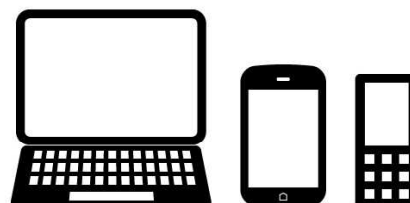
ずつ増えてきています。しかし、一步学校の外へ出た時、自分からあいさつができる児童は、まだまだ少ないのが現状です。特に、通学班の集合場所や登校指導の場所で、学校安全ボランティア・保護者・地域の皆様にあいさつができていないという声がいろいろな会議や学校評価等でも聞かれました。一方、取り組みを通して今年になっても4月初めより元気にあいさつができるようになったと評価

されてもいます。学校でも学校の外でも更に気持ちの良いあいさつができるように指導していきますので、保護者・地域の皆様も、ぜひ子どもたちに御指導をお願いします。

児童の登下校の際、スクールガードリーダー、学校安全ボランティアや保護者の皆様のお力添えを頂戴しております。本当にありがとうございます。直接、お礼申し上げるべきところですが、この場をお借りして心からお礼申し上げます。引き続き、これからも児童の登下校の安全への見守りをよろしく願いいたします。

情報化社会に生きる今日

今日、情報機器（携帯電話・スマートフォン・パソコンなど）は目覚ましい発達を見せていますが、使う私たちの考え方が良くなるも悪くなるもなる“物”です。心の未発達な子どもたちにとっては、大変危険な“物”になる可能性も多いにあります。



さて、人と人との関わりの基本は相手の顔を見て始まる会話です。会話は集団生活を基本とする学校では最も大切なコミュニケーション活動です。顔を見ながらの会話によって相手の気持ちを知り、思いやりや人としての優しさが育つのではないのでしょうか。それが表情や感情の伝わらないメールという方法によって一方通行で済ませていくのであれば寂しいことであり、ましてそれが中傷メールであれば恐ろしいことです。実際、未成年を取り巻くインターネット利用のトラブルが大きな問題になっています。小学生がインターネットゲームで十万元以上も請求された例、パソコンで掲示板に書き込みをした中傷的な内容が喧嘩のもとになった例、出会い系サイトで知り合った異性に被害にあった例、学校では友達を作ろうとせず、ネット上では友達がたくさんいる例などネットが家庭や学校に暗い影を落とし始めています。

確かに、インターネットは私たちの生活の利便性を高めました。電子メールのお陰で、どこにいても都合の良い時間に連絡がとれるようになりました。知りたいこと、分からないことを調べるにも、ネット上で必ずといってよいくらい探し出すことができます。ところが、その利便性を悪用した犯罪を容易にすることも簡単にできるのです。そのことを十分に知った上で使わなければなりません。

危険だからといって情報化した現代社会では、自分の子供だけを隔離することは無理です。現実的には、親と子供が携帯電話(スマホ)の必要性について対話していくことが大事です。必要となったら、正しい使い方を教えていかなければなりません。携帯電話やパソコンを子どもに使わせる時には、その利便性の裏に隠れた陰の部分に遭遇し被害を被るかも知れない覚悟をしておかなければなりません。その覚悟が、子どもたちに注意を促し、被害を被っていないか、人権を侵害していないかをチェックする動きになるはずですが、純粋で無防備な子どもたちを守るには大人が目配り、指導が必要です。

現在では、新しいフィルタリングソフトが開発され、世帯の状況や子供の年齢に合わせて柔軟にフィルタリングを変えられること。親側だけが意思を押し付けて安心を得るのではなく、子供の側の意見を聞いてそれを尊重したり、議論できたりする仕組みが用意されているなど、親の側がフィルタリングや監視を一方向的にするのではなく、親と子が対話してインターネット利用のルールを決め、その上でフィルタリングや監視の細かな設定ができるということです。

今や生活の中になくてはならない情報機器ですが、ルールやマナーなど正しい使い方のできる“心の教育”を家庭や学校でしっかりしていく必要があります。